

論文概要

氏 名 時田 春樹

1. 論文題目（副題を含む）

脳卒中急性期における神経心理学症状の研究 -注意障害と局在性の高い神経心理症状-

2. 論文概要

第 1 部 注意障害とその改善に関する検討

注意は、情報の入力と行動の出力の両面において重要な機能を果たしており、焦点性注意と選択性注意、持続性注意、分割性注意、転導性注意の 5 つに分けられている。注意が障害されると集中力や情報処理能力などが低下することが知られているが、その改善に関する報告はこれまでにない。そこで、急性期の軽症脳出血患者に対して標準注意検査法を含む課題を行いながら、注意障害の評価を継時的に行い、その改善過程を調べることにより、従来指摘されているような注意障害の 5 つの分類を課題の難易度の差により、さらに大きく 2 つに分類することは可能かどうか、注意課題の難易度の違いは注意の改善過程の違いに反映されるのか、課題の難易度の違いは制御機能の関与に関連するのかを検討した。

結果、焦点性・選択性注意と、注意の制御機能に分類された。課題の難易度が低い課題は急性期の段階で改善がみられるが、難易度の高い課題は改善しにくく、回復期や生活期まで残存する可能性が考えられた。そして、難易度の違いは、前頭葉機能の関与の有無、つまり、制御機能の関与の有無であることが考えられた。

第 2 部 急性期に観察される局在性の高い神経心理症状に関する検討

失音楽は左の側頭葉、変形視は脳梁膨大後部領域、記憶障害は脳弓と扁桃核、触覚性失認は右の中心後回、地理的障害は右の海馬傍回や脳梁膨大後部領域、頭頂葉内側部、発話障害は島、失読失書は左の中前頭回と側頭葉後下部に病巣を認めた。

各症例において、限局した病変が出現した領域は、視覚や聴覚、触覚などの一次領野およびその連合野付近であった。視覚に関係する領域の損傷では変形視や地理的障害が、触覚に関係する領域の損傷では触覚性失認などが出現しており、それぞれの領域とそれぞれの感覚モダリティに関連する症状が出現する結果となったことについては、山鳥（2007）の報告を示唆するものであった。

発症から 1 か月前後の早期に回復がみられたことも各症例において共通していた。

第 3 部 総合考察

さまざまな神経心理症状は、脳の全体論と局在論で捉えることができ、脳内において、それぞれの役割を果たしていることが明らかとなった。